

産業資本像の転換のために

——マンチェスタの綿紡績業者フィリップス&リー——

田中章喜

目次

- I はじめに
- II 創業以前
- III 資本と経営
- IV 新鋭工場
- V 労働編成
- VI おわりに

I はじめに

マルクス経済学で資本主義経済を捉える際に最も重要な視角の一つは、マルクス自身の著作が『資本』と題されたように、その社会的編成などを考察する前に、資本、或いは資本家のあり方にひとまず着目する方法であるといつてよい。実際、マルクスは、『資本論』を展開するに当たって、19世紀イギリス資本主義における資本と資本家の具体的な諸相を出来る限り一次的な資料に基づいて把握することに努め、そのイメージをもとに資本の理論的展開をはかったのであった。こうしたマルクス経済学の構えは、独自の三段階論の提唱によってマルクス経済学研究の地平を飛躍的に高めた宇野弘蔵によっても踏襲されているといえよう。というのも、彼が『資本論』を原理論として純化しえたのは、それに先立つ『経済政策論』の研究の中で、資本主義経済の史的発展過程における支配的資本の具体的な蓄積のあり方を知覚しえたことに大きく依存していると思われるからである。しかも、近年、理論研究においては、以前にも増し

産業資本像の転換のために（田中）

て競争論的観点の重要性が主張され、個別資本の行動様式をその展開動力とすべきであるとする所謂行動論的アプローチが提唱され、また、段階論研究においても支配的資本の蓄積様式をより一次的な資料に依拠して確定しようとする方法が主流となっていることから、マルクス経済学の研究の創造的な発展には、原理論研究や段階論研究を押し進める以前に、より具体的な資本家のあり方について一次資料などに深く沈潜することによって、分析者自身のイメージを豊かにしておくことが求められているといえよう¹⁾。

しかし、こうしたマルクス経済学研究に際しての構えが多くの研究者によって共有されていると考えられるにも関わらず、依然として、現実の像と研究によって描かれる像との間に大きなギャップが存在する対象がある。その最大のものが19世紀イギリス資本主義における産業資本・産業資本家像であると思われる。19世紀末以降の金融資本については、様々な問題は存在しつつも、その研究のもとには常に豊富な具体的イメージが存在し、様々な有効な議論が行われてきたわけであるが、奇妙なことにマルクスが理論展開の題材とした19世紀資本主義の産業資本については、特別の懐疑の念を持って批判的に検討されることが殆どなかったといってよい。このために、原理論研究においても、いつてみれば極端な展開が図られるとともに、段階論研究においても、産業資本と金融資本は異質なものとしてのみ論断される傾向を生んでいるように思われる。

しかし、マルクス自身、理論構築に際して様々な資料を解読する中で、産業資本のイメージを作り上げていったとはいえ、その像には大きな難点が存在するのである。というのも、彼が産業資本家として『資本論』の中で捉えたのは、疑いもなく19世紀イギリスの繊維業者であったわけであるが、実際、彼が詳しく知っていた産業資本家といえば、水力紡績機械の発明者であるリチャード・アークライトぐらいであったといってよい。同様のことは宇野についても指摘出来る。彼の『経済政策論』の自由主義段階論においては、アークライト、ハーグリーブス、クロンプトンといった発明家か、或いは自由主義的政治家としてのコブデン、ブライトなどが触れられているのに過ぎない²⁾。勿論、個別的

な事象が実際に原理論や段階論の展開に直接利用されねばならない必要はないが、少なくとも従来の研究においては、理論の展開に際してだけでなく、段階論研究においても、その中心的な位置を占める産業資本と産業資本家のあり方についてのイメージが余りにも貧し過ぎたように思われるのである。

また、いうまでもなく、原理論や段階論の具体的な展開以前に要求されるいわば一次想定的な像がどのようなものであろうと、原理論や段階論そのものが正しく展開されればよい。だが、残念なことに、従来の原理論や段階論研究は、一次的に想定された像に規定されてその産業資本・産業資本家認識について誤った議論を積み重ねてきたように思われる。こうした研究状況の中では、いわば正面からそうした議論を批判するだけでなく、実際に18世紀末から19世紀にかけてイギリス綿紡績業の発展を主導したリーディング・ファームの実態を明らかにすることを通して、従来の産業資本・産業資本家像の転換のための題材を提供してみることも研究の進展にとっては一定の有効性を持つであろう³⁾。というのも、19世紀イギリス産業資本を対象とする実証史家の研究においてでさえ、個々の具体的なケースがかなり明らかにされつつあるとはいえ、19世紀イギリス綿工業で中心的な役割を果たした資本家については未だに十分な解明が進んでいないからでもある⁴⁾。

こうした問題意識から、ここで叙述の対象とされたのは、18世紀末から19世紀初頭にかけてのイギリス綿紡績業における革新的企業家であったフィリップス&リーである⁵⁾。彼らは後の研究者には殆どその存在が看過されてきたが、その革新性は同時代人には明白であった。彼らは資本蓄積に当たって様々な手段を駆使し、急激な資本成長を達成したとともに、当時のイギリス綿紡績業界の利害をも代表した。しかし、ここでは、彼らによる社会活動や政治活動については割愛し、資本蓄積に直接的に関わる問題を詳しく明らかにすることを通して、従来のマルクス経済学における産業資本・産業資本家像に再検討の題材を提供してみたい。

- 1) なお、私自身は、宇野とは違って、原理論の展開に際して一次想定される純粋資本主義は自由主義段階のイギリス資本主義に限定される必要はないと考えている。

産業資本像の転換のために (田中)

なお、この点については山口重克『資本論の読み方』(有斐閣, 1987年) 第1章を参照されたい。

- 2) こうしたことは、マルクスの『資本論』や宇野の『経済原論』『経済政策論』を詳しく読むことによって知ることが出来よう。
- 3) こうしたいわば正面からの議論については、私自身、次のような研究をすでに発表しているので参照されたい。田中章喜「産業革命再考」『政経論叢』第64号(1988年)、同「産業資本の所有と経営」『政経論叢』第65号(1988年)、同「産業資本の蓄積様式」『政経論叢』第66号(1988年)。なお、次の研究は、従来の産業資本・産業資本家像へ一定の修正を迫るものとして有効である。杉浦克己「マコンネル・ケネディ」『社会科学紀要』第32輯。
- 4) 例えば次のような研究を見れば分かるように、産業資本家として詳しく触れられているのは、発明家であった者か産業革命初期の水力紡績業者が殆どである。P. Mantoux, *The Industrial Revolution in the Eighteenth Century* (1906: Translated by M. Veron, rev. ed., 1961, 徳増栄太郎・井上幸治・遠藤輝明訳『産業革命』東洋経済新報社, 1964年); L. Urwick and E. F. L. Brench, *The Human Factor in Management, 1795-1943*, 2 vols. (1944); T. S. Ashton, *The Industrial Revolution 1760-1830* (1948, 中川敬一郎訳『産業革命』岩波文庫, 1973年); S. G. Checkland, *The Rise of Industrial Society in England, 1815-1885* (1964); P. Mathias, *The First Industrial Nation* (1969, 小松芳喬監訳『最初の工業国家』日本評論社, 1972年)。

また、ランカシャの綿紡績業の研究も近年は個別企業の実態にまで立ち入った詳細な研究が行われているが、ミュール紡績業全体に対して大きな意義を持った企業家活動としてあげられることといえば、サミュエル・クロンプトンのミュール紡績機の発明とロバート・オウエンの1790年代におけるマンチェスターのドリンクウォーターの工場での短期間の活動程度であろう。しかし、クロンプトンは周知のように企業家としては失敗したし、オウエンは、ここで述べるフィリップス&リーのジョージ・リーから大きな影響を受けていたたとともに、その後、彼はスコットランドのニューラナーク工場の経営者となっているので、18世紀末から19世紀初頭にかけてのランカシャ綿紡績業がどのような企業家によってリードされていたのかという問題は依然として不明なのである。なお、こうした問題と研究史については、田中「産業革命再考」、同「産業資本の所有と経営」、同「産業資本の蓄積様式」における該当箇所を参照されたい。

- 5) 従来の研究でフィリップス&リーの活動に詳しく触れたものはなく、一部の研究がジョージ・フィリップスとジョージ・リーについて簡単に触れる程度であった。そうした研究としては、例えば、R. S. Fitton and A. P. Wadsworth, *The Strutt and the Arkwright* (1958), pp.215, 228; A. P. Wadsworth and J.

L. Mann, *The Cotton Trade and Industrial Lancashire 1600-1780* (1965), p. 289などを見られたい。

II 創業以前

ジョージ・フィリップスはマンチェスター有数の商家フィリップス家のトマス・フィリップスの子供として生まれた。フィリップス家は18世紀末のマンチェスターのマーチャント・マニュファクチュアラーを代表する商家であり、絹、スモールウェア、ファスチアン、チェック、帽子と当時のマンチェスターの代表的な商品の殆どを商う商家であった¹⁾。しかも、ジョージの父であるジョンは裕福な商人であっただけでなく、熱心な非国教徒、メソジストでもあった。彼は日曜日ともなると朝早くから子供のジョージを連れてメソジスト派教会のミサに参列しただけでなく、夕方にも再度祈りのために教会へ足を向けるほどの信仰心あつき信者であった²⁾。

ジョージは成長すると叔父たちが設立したフィリップス家の家族企業J & N・フィリップスで主としてファスチアン製品の商いに携わり、そこで仕事を通して商取引や事務処理などの訓練を受け、商人としての修行を積んだ。そして、遅くとも1780年代には父親の友人で同じメソジスト教徒であるウィリアム・ウッドとフィリップス&ウッドという企業を設立し、主として綿製品を商う事業を開始している³⁾。

他方、ジョージ・リーはジョージ・フィリップスとは全く違った家庭環境に育った。ジョージ・リーの父親は当時有名な俳優であったジョン・リーで、また、ジョージの姉妹は後に小説家として大成している⁴⁾。そうした文化的な家庭に育ったジョージ・リーは幼い頃から科学と数学に強い興味を持ち、青年時代には理数系の学問を熱心に学んだのであった。そんな彼がどのような関係から商人ピーター・ドリンクウォーターと知り合ったかは現在では分からないが、ジョージ・リーもまた遅くとも1780年代にはドリンクウォーターに工場経営者として雇われ、チェシャのノースウィチに新しく建てられた水力紡績工場

産業資本像の転換のために（田中）

の経営を担当するようになった⁵⁾。

その工場ではアークライト紡績が行われていたが、リーの雇い主ドリンクウォーターは80年代に出現した新しい紡績技術であるミュール紡績に逸早く着目し、1789年にマンチェスタで最初の本格的な大規模ミュール紡績工場である通称バンク・トップ工場を設立した。バンク・トップ工場は、当初スラックという者によって管理されていたが、彼が着任まもなく死亡したために、ドリンクウォーターは急拠リーをマンチェスタに呼び出し、彼を新しいミュール紡績工場の経営者にしたのであった⁶⁾。これが、リーとランカシャのミュール紡績業との最初の出会いであった。

1780年代末といえ、アークライト紡績ですらアークライトの機械の特許が切れた80年代中葉に広まり出しただけでなく、ミュール紡績に到ってはまだその幼少期とでもいうべき時代にあり、その工場経営には見習うべき手本もない状態であった⁷⁾。しかも、ミュール紡績の本格的な工場生産はドリンクウォーターのバンク・トップ工場によって開始されたといっても過言ではなく、リーは自ら草創期のミュール紡績業の開拓者とならねばならなかったのである。

リーはそうした困難な状況のなかで様々な新方針を打ち出し、最初のミュール紡績の工場生産を軌道に乗せた。バンク・トップ工場はリーの経営によって成功を収め、その名声はマンチェスタの産業界に広がったのである⁸⁾。また、周知のように綿工場の評判はマンチェスタの上流・中流階級の間でも概して悪く、工場経営者は中流階級以下の存在として見られていたが、ジョージ・リーの経営によるバンク・トップ工場の成功によってマンチェスタの上流・中流階級はその認識を新たにし、彼は1790年に工場経営者としては初めてマンチェスタ哲学文芸協会という当時のマンチェスタの上流・中流階級の団体のメンバーに迎え入れられている⁹⁾。

こうしたリーによる工場生産の成功によって、多くのマンチェスタの商人たちは新しいミュール紡績業の将来性を見て取り、続々と新規参入して来た。というのも、アークライト紡績などによって作られる糸と違ってミュール糸の価格は格段に高く、しかも、それはモスリンなどの高級綿織物の原料になってい

たことは多くの資産家を刺激したのである¹⁰⁾。フィリップス家とジョージ・フィリップスもその例外ではなかった。彼らは1790年代初期にミュール紡績への参入を決定し、綿紡績工場の建設に着手したのである¹¹⁾。

だが、ミュール紡績に新規参入した商人にとっての最大の問題の一つは工場管理の問題であったと見てよい。いうまでもなく、期待される利潤率は安定した工場生産が存在して初めて保証されるわけであるが、工場主となった商人たちは商業活動についてはその能力は問題無いが、工場の管理・運営については全くの素人であったのである。勿論、このことはフィリップスについても当てはまる。そこでジョージ・フィリップスが考えたことは、その有能さが証明された人材をパートナーとして迎え入れ、工場経営を担当させるという方法であった。フィリップスはドリンクウォーターのバンク・トップ工場の経営者としてその名声を広めていたジョージ・リーに目を付け、遅くとも1792年にはバンク・トップ工場から引き抜き、ジョージ・フィリップスの企業の新しいパートナーとして迎え入れた¹²⁾。ここにマンチェスタの綿紡績企業フィリップス&リーが誕生したのである。

- 1) Wadsworth and Mann, *op. cit.*, p. 289.
- 2) Sir George Philips, *Memoirs*, Warwick County Record Office, CR 1381/2/1-2.
- 3) *Ibid.*, CR 1381/2/3.
- 4) *Manchester Mercury*, 15 Aug. 1826 ; *Gentleman's Magazine*, Sep. 1826.
- 5) *Parliamentary Papers*, 1816, III, *Report on the Children in the Manufactories*, p. 356.
- 6) W. H. Chaloner, 'Robert Owen, Peter Drinkwater and the Early Factory System in Manchester, 1788-1800', *Bulletin of the John Rylands Library*, XXXVII (1954), pp. 85-6, 92.
- 7) 田中「産業革命再考」, 30-40頁。
- 8) R. Owen, *The Life of Robert Owen*, I (1857), p. 26 (五島 茂訳『オウエン自叙伝』岩波文庫, 1961年, 58頁)。
- 9) *Ibid.*, I, p. 35 (訳73頁) ; *Complete List of the Members and Officers of the Manchester Literary and Philosophical Society* (1896), p. 29.
- 10) 田中「産業革命再考」, 40-44頁。

産業資本像の転換のために（田中）

- 11) Owen, *op. cit.*, I, p. 26 (訳 58 頁) ; Chaloner, *op. cit.*, p. 86.
- 12) ドリンクウォーターがリーの後任の工場経営者を募集する広告を出したのが1792年4月であるから、それ以前にリーはフィリップスに引き抜かれたと見てよいだろう。Manchester Mercury, 17 April 1792 ; Manchester Herald, 21 April 1792.

Ⅲ 資本と経営

フィリップス&リーは創業と同時にマンチェスタのソルフォド地区に当時としては最新の大規模なミュール紡績工場を設立した。その規模を正確に示す資料は現在では残っていないが、彼らが加入していた火災保険の資本評価額でそのおよその額は知ることが出来る。それによれば、彼らのソルフォド工場は1795年の時点で建物と機械類だけで4,500ポンド、総額5,000ポンドの当時としては大規模な工場であったことが分かる¹⁾。おそらく、ソルフォド工場の労働者総数は1790年代においてすでに500人は越えていたものと推測できる²⁾。

その後も、この工場は拡張され、その資本規模も拡大していった。例えば、1811年の所謂クロプトン調査によれば、フィリップス&リーの工場の紡績錠数は4万2600で、イギリス有数の生産規模であったことが分かる³⁾。また、1816年の議会の委員会の調査によれば、彼らの工場は総労働者数937人にものぼっているのである⁴⁾。

資本総額となると、その巨大さがより明瞭となる。周知のように、産業革命期のイギリス綿工業では固定資本を上回る流動資本が必要であった⁵⁾。事実、彼らの企業では工場の資本額を遥かに上回る流動資本を有していた。フィリップス&リーでは、先に見たように1795年における工場の資本規模は約5,000ポンドであったが、その前年における資本総額は21,697ポンドにもものぼっており⁶⁾、資本総額の77%もの額が流動資本として投資されていたことが分かる。また、彼らはナポレオン戦争期というリスクの高い時期においても順調な資本成長を達成し、1814年には259,312ポンドもの資本規模に成長していることが残存する経営資料から分かる⁷⁾。その後も、彼らは順調に経営を続け、その資

本規模を拡大したが、残念なことに、パートナーシップ解散時の資本総額は現在では資料が残存していないので具体的には知ることは出来ない。ともあれフィリップス&リーは産業革命期イギリス綿紡績業界有数の巨大企業であり、急激な資本成長を達成した優良企業であったことは理解できよう。

ところが、こうしたフィリップス&リーの急激な資本成長は二人の資本家の資本出資と企業経営の中で生み出された利潤の再投資のみによって達成されたわけではない。

フィリップス&リーは外部からの資金の借入に大きく依存した経営を続けており、現在判明するだけでも、1794年から1804年にかけて51,037ポンドもの資金を借り入れているのである。また借入に対する利子も巨額で、1811年から1814年の不況期においても総額79,320ポンドの返済を行っているし、残る借入資金に対する利子も1814年の時点で63,117ポンドに達しているのである⁸⁾。これは現在残っている資料から知ることが出来る数字だけなので、フィリップス&リーは実際には先の数字以上の額の資金を借り入れ、多額の利子を負担していたものと思われる。

しかも、フィリップス&リーは個人によって所有されている個人企業では勿論なく、しかも二人のパートナーによって所有されている共同企業でもなく、その資本所有のあり方は複雑であった。フィリップス&リーは、フィリップス家の家族企業であるG・J&N・フィリップス&カンパニーの出資とチャールズ・ウッドの出資によって設立されたのである。ジョージ・フィリップスはフィリップス&リーに対して直接資本を出資しておらず、G・J&N・フィリップス&カンパニーへの出資を通していわば間接的に資本を出資していたのであり、しかも、工場経営を直接担当していたジョージ・リーに到っては資本を直接出資することがないパートナーであり、実際には経営者といってもおかしくはない存在であったのである⁹⁾。

こうしたことと関連して、当時のイギリスでは、企業の名称が必ずしもその資本所有関係を正確に反映することは少なく、多くの場合、企業名に現れない匿名パートナーが存在していたことにも注意すべきであろう。このことはフィ

産業資本像の転換のために（田中）

リップス&リーの事例にも見出せる。というのは、彼らの企業の資本所有関係は先に見たように複雑なものであったが、1790年代から1800年代にかけては、彼らの企業の名称は「綿紡績業者 ジョージ・リー」となっており¹⁰⁾、1810年代に入って「綿紡績業者 フィリップス&リー」と称されるようになってきているからである¹¹⁾。また、そうした一般的な名称とは別に、取引などでは別の名称が使用されることもあり、例えば火災保険の加入に際してなどはジョージ&ジョン・フィリップス・ウッド&リーと称されている¹²⁾。いずれの名称も実際の資本出資関係を正しく反映していないのである。

その上、一貫して企業名にあげられていたリーは、先に見たように資本を出資していないのに工場経営担当のアクティング・パートナーとなっており、彼自身は、実質的には経営者的な存在であったといえよう。その上、フィリップス&リーはリー以外にも、資本を出資していないが経営活動に従事する人間を雇っていたことを伺わせる資料も存在するほどである¹³⁾。

いずれにせよ、フィリップス&リーは小さな企業から出発して除々に規模を拡大していったのではなく、新規参入の時点においてすでに巨大な企業であり、その資本蓄積のあり方も所謂個人企業的なものではなく、外的な資金に依存したものであった上に、資本を実際に所有している人間によって工場が経営されていたのではなく、資本を出資していない者によって実際の経営が行われていたのである¹⁴⁾。

- 1) Sun Insurance Office MSS., Guildhall Library, Policy Register, ser. CD, vol. 9, no. 64431. なお、当時の火災保険では固定資本だけでなく他の様々な流動資本にも保険を掛けることが行われていたが、フィリップス&リーは固定資本にしか火災保険を掛けていない。なお、1795年における他のマンチェスタの綿紡績業者の資本規模については、田中「産業革命再考」付録1を併せて参照されたい。
- 2) というのは、同時代のドリンクウォーターのマンチェスタのバンク・トップ工場の資本評価額は4,800ポンドであり、その労働者総数は約500人であったからである。Royal Exchange Assurance Company MSS., Guildhall Library, Fire Policy Register, 2nd Original ser., vol. 29, no. 143469; Owen, *op. cit.*, I, p. 28 (訳60頁)。
- 3) Statistics obtained in 1811 by Samuel Crompton, Manchester Public Library,

F 677/C 38.

- 4) P. P., 1816, III, *Report on Children in Manufactories*, p. 339.
- 5) S. Pollard, 'Fixed Capital in the Industrial Revolution in Britain', *Journal of Economic History*, XXIV(1964), pp. 301-302 ; S. D. Chapman, 'Financial Restraints on the Growth of the Firms in the Cotton Industry, 1790-1850', *Economic History Review*, 2nd ser., XXXII (1979), p. 64.
- 6) Papers of George Philips, An Abstract of Capital, Shakespeare Birth Place Trust Record Office, DR 198/167/1.
- 7) *Ibid.*
- 8) *Ibid.*
- 9) *Ibid.*
- 10) *The Universal British Directory*, vol. 2 (1793) ; *Dean's Manchester and Salford Directory for 1808 and 1809* (1808).
- 11) *The Commercial Directory for 1818-19-20* (1818) ; *Pigot and Dean's Directory for Manchester* (1824).
- 12) Sun Insurance Office MSS., Policy Register, Guildhall Library, ser. CD, vol. 9, no. 64431.
- 13) *Manchester Mercury*, 13 December 1791.
- 14) こうしたフィリップス&リーの事例が例外的なものではなく、かなり一般的であり、これらの諸点についての従来の通説を詳しく批判したものと、田中「産業革命再考」、同「産業資本の所有と経営」、同「産業資本の蓄積様式」を参照されたい。

IV 新鋭工場

フィリップス&リーのソルフォド工場はただ単にその規模が大きかっただけでなく、当時としては最新の科学技術を導入した新鋭工場でもあった。しかも、そうした当時として最先端の技術のフィリップス&リーの工場への導入は、単に企業の外部からそれを買入れることによっておこなわれたのではなかった。

綿工場の主たる生産技術である紡績機械と蒸気エンジンについても、リーは出来合いのものを買入れることで満足することはなかった。彼はドリンクウォーターのバンク・トップ工場での経験を活かし、彼自身の創意工夫によって

産業資本像の転換のために（田中）

改良された紡績機械を工場に備え付けるとともに、蒸気エンジンについても友人であるボルトン&ワットの協力のもと、彼らに事細かな指示を与え自分たちの工場に合った性能の優れた蒸気エンジンを備え付けている。このように、フィリップス&リーでは、資本家自らが技術者としての能力を使って最良の生産手段を入手するとともに高品質の製品を生産するための改良が怠られることがなかったのである¹⁾。

しかも、フィリップス&リーでは、こうした紡績機械や蒸気エンジンといった主要な機械体系だけでなく、工場の生産性の上昇や生産のリスクの回避のためになる新しい実用的な技術を開発、導入することに熱心であり、その多くは他の綿紡績業者に先んじて行われたのである。なかでも、次の三つの技術の導入は重大な意味を持っていた。その三つとは防火建築、照明設備、暖房設備である。

18世紀末の綿紡績工場は木造部分が多く、床の多くも木でできていた。その床は、機械の維持に使用される大量の油のために汚れ、その上、室内照明がロウソクやランプで行われていたため、いつ火事が起こっても不思議ではなかった²⁾。事実、多くの工場は火事に見舞われ、一瞬の内に灰に化している。それも、中小の工場は勿論のこと、ジェイムズ・ケネディ、ホロックス&カンパニー、アインズワース&カンパニーといった大企業の工場も例外ではなかったのである³⁾。産業革命期の綿紡績資本家にとって、火事を予防することと、また、万一火事になった場合でもその損害を最小限に留めることは最大の関心事であったといってよい。

そうした中で、ジョージ・リーは、友人のウィリアム・ストラットが考案したキャスト・アイアンによる鉄筋建築物を改良し、防火建築物を最初に考案することに成功した⁴⁾。彼はフィリップス&リーのソルフォド工場をその新技術を利用して防火建築にするとともに、また、工場の床の殆どをタイル張にしたのである⁵⁾。こうした方法で建てられたソルフォド工場は実際に大きな威力を発揮した。フィリップス&リーのソルフォド工場も不運にも1801年3月3日に火事に見舞われたが、防火建築物であったため、火事はすぐに消し止められ、

被害は最少で済んだと当時の新聞はフィリップス&リーの防火建築工場の威力を賞賛する記事を掲載している⁶⁾。というのも、当時の工場が火事になった場合、大抵全焼し、死傷者が多数出ること稀ではなかったからである⁷⁾。このリーによって開発実用された防火建築法は、多くの綿工場主の注目を集め、その後、多くの企業に普及したのである。

同時に、リーは工場の照明設備の改良にも熱心であった。当時の工場は朝早くから夕方遅くまで稼働するために照明は不可欠であったが、その照明は先に述べたようにロウソクやランプで行われていたために、それは火事の温床となったとともに十分な照明を得られないという作業環境の悪化を招いていた。その頃、リーの友人である科学者マードックが1802年に石炭ガスによる照明の実験を成功させたが、リーはその成果を逸早くソルフォード工場に取り入れることに決定し、ロウソクやランプに代えてガス灯による照明を導入したのである。この経験はガス灯の優秀さを立証することになり、その後、ガス灯は多くの大規模工場によって取り入れられていっただけでなく、都市の街灯にも使用されるようになったのである⁸⁾。

また、暖房設備の改善にもリーは積極的であった。ミュール紡績機を順調に稼働させるには一定の高温状態を維持する必要があり、そのため、紡績工場は各職場に必ずストーブを備え付けねばならなかったのである。しかし、このストーブによる暖房は経済効率も悪く、しかも、室内を均等に暖めることが出来なかったので紡績作業に支障をきたすこともしばしば起こった⁹⁾。また、いうまでもなく、こうしたストーブによる暖房は火事の原因にもなっていたのである。

そこで、リーは1799年末に、友人のボルトン&ワットに相談するなかで蒸気機関のステームを利用した暖房設備を考案し、1800年には実際にそのステーム暖房設備をソルフォード工場に導入したのである。このステーム暖房の発案と導入もこの種のものとしては最も早いものの一つであり、その後、多くの製造業者が追随したことはいうまでもない¹⁰⁾。

いずれにせよ、フィリップス&リーは、他の多くの資本家に先駆けて、当時

産業資本像の転換のために（田中）

最新の技術を導入し成功を収め、当時の綿紡績業界を技術面においてもリードしていたのであった。しかも、他社に先駆けて新技術の導入に成功したのは、資本家みずからの手腕に寄るところ大であったといえよう。最初の工業化を担った19世紀前半のイギリス綿工業における大工場は、多くの職人や家内工業に従事していた者の職場とは違って、当時としては最先端の科学技術が装備された最新のものであったのである。

- 1) *Annual Biography and Obtuary*, XI(1827); *Manchester Mercury*, 15 Aug. 1826.
- 2) *P. P.*, 1816, III, *Report on Children in Manufactories*, p. 351.
- 3) *Manchester Mercury*, 1 March 1803, 24 April 1804.
- 4) *Manchester Mercury*, 15 Aug. 1826.
- 5) *P. P.*, 1816, III, *Report on Children in Manufactories*, p. 351.
- 6) *Manchester Mercury*, 4 Aug. 1804.
- 7) 例えば、マンチェスタのカービー & ウッドの火事では労働者11人が死亡している。*Manchester Mercury*, 3 Feb. 1801; *Gentleman's Magazine*, Feb. 1801, p. 175.
- 8) *Manchester Mercury*, 15 Aug. 1826.
- 9) *P. P.*, 1816, III, *Report on Children in Manufactories*, pp. 351, 355.
- 10) R. Buchanan, *Practical and Descriptive Essays on the Economy of Fuel and Management of Heat* (1810), p. 15.

V 労働編成

産業革命期のイギリスの資本家にとって工場経営の最大の問題が労働者の管理問題であったことはいうまでもない。というのは、当時のイギリスの多くの「下層」階級の人々は聖月曜日の風習を持つとともに定時労働の風習を持っておらず、その上、一定の規律に従うことを嫌っていたからである。だから、当時の資本家にとって工場労働に適した人材を確保し、職場秩序を維持することは最大の困難事であったといってよい。

そうした中で、19世紀のイギリスの産業資本家が選択した方法が間接雇用・間接管理の方法であったといわれている。つまり、資本家は、熟練労働者を雇

い入れ、残る人員の採用や生産の管理については全てその熟練労働者に委ね、自らは工場を間接に管理する方法、より実質的には自ら工場を管理することを諦める方法が主流を占めたといわれている¹⁾。この間接雇用・間接管理は、19世紀イギリス綿工業においても支配的であり、そうした方法が直接雇用・直接管理体制に移行するのは早くとも19世紀後半以降であると主張されてきたが²⁾、興味深いことにフィリップス&リーでは19世紀の初めから様々な管理が他社に先駆けて行われただけでなく、のちに拡大する直接管理体制が19世紀初頭にすでに先取りされているのである。

まず第一にフィリップス&リーの貢献としてあげなければならないのは、定時労働の最初の強制である。もともと、1780年代の工場では、間接管理が行われていた上に、水力に依存していたために技術的にも定時労働を強制することができなかった。1790年代に出現した蒸気エンジンを備えた都市の綿紡績工場でも、不規則労働が大きな問題となった。周知のようにミュール紡績は、その基幹工程が熟練労働者である紡績工によって担われ、当初、全ての工場では間接雇用・間接管理の方法が取られており、労働時間についても、熟練工であるミュール紡績工の裁量に任せられていたのである³⁾。

こうした中で、初めて、労働者から労働時間の決定権を奪い、労働者に定時労働を強制したのが、バンク・トップ工場時代のジョージ・リーであった。彼は、バンク・トップ工場に着任するや否や、今まで労働時間が労働者の自由に任せられていたことを改め、朝6時から夕方7時までの定時労働を労働者に強制したのである⁴⁾。こうした方法はフィリップス&リーのソルフォド工場でも取られ、そこでは労働時間は朝6時から夜8時までとされ、うち1時間は食事と休憩に当てられ、実質労働時間は1日13時間とされた⁵⁾。まさに、こうした工場における定時労働の強制はリーによって開始されたといつてよい⁶⁾。しかも、フィリップス&リーでは、その実施にあたっては労働者の反発に対処するために、いわばアメとムチからなる巧妙な対策が取られたのである。その対策とは、1日の労働時間の内の4分の1以上遅刻した者については容赦なく解雇したが、定刻から少し遅れた程度の遅刻は恩恵として労働者に認めたのであ

産業資本像の転換のために（田中）

る⁷⁾。

ところで、こうした定時労働の最初の実施という資本主義的生産にとって最も重大な変革がフィリップス&リーのジョージ・リーによって最初に行われただけでなく、彼はそれとは別の画期的な労働者管理をも実行している。そして、そうしたフィリップス&リーにおける資本家による労働者の管理が実施されてゆく背景には、当時の綿工業資本家の最大の悩みの種であった紡績工の戦闘的運動があった。

マンチェスタのミュール紡績工は1792年に相互扶助を目的とする友愛組合を結成しているが、その友愛組合はただ単に経済的な相互扶助を目的とした友愛協会に留まらず、同時に労働組合としての機能をも果たすようになっていた。彼らは職場規律を問題としたり賃金率の引き上げを求めて戦闘的な運動を繰り広げたのである。しかも、彼らは、闘争手段としてストライキ、当時の言葉でいうターン・アウトを行うだけでなく、工場を取り囲み投石したり騒動を巻き起こしたりと、様々な戦術を駆使するとともに、その闘争をエスカレートしていった。

こうした紡績工組合の運動は綿紡績工場にとって大きな損害を与えるものであったといってよい。数の上では紡績工は少数ではあっても、基幹工程である精紡工程が維持できなければ、工場の生産は全面的に停止するからである。勿論、フィリップス&リーの工場でもその例外とはならなかった。なぜなら、当時のマンチェスタのミュール紡績工は工場の塀を越えた地域全体にまたがる横断的な組織を築いていたからである⁸⁾。

こうした状況のなかで、他の多くの企業は特別な労働者対策を実施することなく終わっていたが、フィリップス&リーでは様々な方策が実施されたのである。その第一のものが共済基金の設立である。フィリップス&リーでは、労働者の自助的組織である労働組合や友愛協会の共済基金に対抗し、彼らの企業に働く労働者のみが加入できる共済基金を設立した。この共済基金は労働者の積立に主として基づき、疾病などによる欠勤によって賃金が支給されない時に基金から一定額が支給されるようになっていた⁹⁾。しかも、このフィリップス&

リーの共済基金はイギリスで初めて企業によって設立されたものであったのである¹⁰⁾。企業による共済基金は、フィリップス&リーでの設立以後、徐々にではあるが普及し、同時代のイギリス綿工業企業でも、一部の大企業ではすぐさま同様の基金が設立されている¹¹⁾。

さらに、こうした共済基金の設立と並ぶ画期的な方策が直接管理体制の確立であったといつてよい。

当時の綿紡績工場では、精紡工程を除けば直接管理がなされていたが、最大の工程であり、しかも、基幹部分をなす精紡工程は熟練工であるミュール紡績工の管理に委ねられており、しかも、彼らは戦闘的な運動を繰り広げていたのであった。ところがフィリップス&リーでは、紡績工が賃金引き上げを求めてストライキに入った時、リーはストライキに参加した紡績工全員を解雇するとともに、新しい紡績工として女性労働者を雇い入れたのである¹²⁾。紡績工として雇われた女性労働者は紡績工としての熟練を企業内で形成させられるとともに、従来、紡績工が雇い入れていた糸継工も企業が直接雇用することになった。また紡績室の管理については新しく紡績室に配属されたオーバールッカーが行うことになったのである。しかも、女性紡績工は、綿工場において女性が担当している他の職種よりも高い賃金の支給を受けたが、その賃金率は成年男子の紡績工のものよりも格段に低く、企業にとっては有利であった¹³⁾。まさに、フィリップス&リーでは、間接管理体制から直接管理体制への移行が19世紀初頭にすでに実行され、また、性差による差別が積極的に利用されたといつてよい。

そうした中で、マンチェスタの紡績工組合は女性紡績工の排除を求め激しい運動を繰り広げ、フィリップス&リーはその度に紡績工組合によって引き起こされる騒動に巻きこまれたが、結局、そうした運動もフィリップス&リー社における女性紡績工の雇用と直接管理体制を打破するには到らなかった。その象徴的な出来事として、1818年のマンチェスタのゼネラル・ストライキをあげることができる。マンチェスタの綿紡績工組合は1818年に賃金引き下げ反対のゼネラル・ストライキを組織し、このストライキは他の地方都市の紡績工組合の

産業資本像の転換のために（田中）

みならず他職種の労働者の援助を受けて長期化し、マンチェスタの殆どの綿紡績工場は操業停止を余儀なくされただけでなく、毎日のように紡績工による騒擾に巻き込まれ、工場の設備が破損したり、死傷者がでたりした¹⁴⁾。しかし、このゼネ・ストの中、唯一、ストライキとは関係なく操業を継続出来た工場があった。それが、フィリップス&リーのソルフォド工場であった。ソルフォド工場は、直接管理体制に移行しており、戦闘的な紡績工組合員を完全に排除していたとともに、組合に同情的な労働者を殆ど生まず、ゼネ・スト中、紡績工組合に取り囲まれ投石される中でも生産を続けることが出来たのである¹⁵⁾。

この直接雇用・直接管理の体制は、同じ頃、イギリス綿工業の一部の企業にも普及するが、それが支配的になるのは19世紀後半を待たねばならなかった。しかし、フィリップス&リーは、こうした19世紀後半以降の資本主義的生産の編成のあり方をいわば先取りし、一定の成功を収めた点は看過されてはならないであろう¹⁶⁾。

- 1) 例えば以下の文献を参照されたい。S. Pollard, *The Genesis of Modern Management* (1965, 山下幸男・桂芳男・水原正享訳『現代企業管理の起源』千倉書房, 1982年) ; E. P. Thompson, *The Making of the English working Class* (1963) ; H. Braverman, *Labor and Monopoly Capital* (1974, 富沢賢治訳『労働と独占資本』岩波書店, 1978年)。
- 2) W. Lazonick, 'Industrial Relations and Technical Change : the Case of the Self-Acting Mule', *Cambridge Journal of Economics*, 3 (1979), pp. 232-3, 278. なお、ラゾニックがいうように、イギリス綿紡績業では、19世紀中葉まで間接雇用体制が中心であったのは確かではあるが、そうした間接雇用体制が、彼が言うように当時の工場制に依存しない他の熟練職種で見られた労働者によるクラフト・コントロールによって職場が支配されていた間接管理体制と同一視することは出来ず、どちらかといえば、直接管理としての特質を備えていたと思われるが、こうした自由主義段階の産業資本における労働編成の問題については、いずれ詳述する機会を持ちたい。
- 3) P. P., 1816, III, *Report on Children in Manufactories*, p. 235.
- 4) *Ibid.*, p. 256.
- 5) *Ibid.*, p. 340.
- 6) 1790年代のマンチェスタの綿紡績工場で、定時労働が強制されていた工場は数工場しかなく、しかも、最初に実施したのがドリンクウォーターのバンク・トップ工

- 場であったが、この点についてはとりあえず、Owen, *op. cit.*, I, p. 31 (訳65頁)。
- 7) *Ibid.*, p. 356.
 - 8) 1790年代から1800年代の綿紡績工の初期の運動についての詳しい研究は依然として存在しないが、とりあえず、S. J. Chapman, *The Lancashire Cotton Industry* (1904), pp. 192-194, 198-199 ; N. J. Smelser, *Social Change in the Industrial Revolution* (1959), p. 229 ; R. G. Kirby and A. E. Musson, *The Voice of the People* (1975), p. 13 ; R. Glen, *Urban Workers in the Industrial Revolution* (1984), pp. 66-69, を参照されたい。なお、この時期のイギリス綿紡績工の運動についてはいずれ詳述する機会を持ちたい。
 - 9) *P. P.*, 1816, III, *Report on Children in Manufactories*, pp. 341-2, 352.
 - 10) *Manchester Mercury*, 15 Aug. 1826 ; *Annual Biography and Obituary*, XI (1827).
 - 11) マンチェスタの巨大企業パーリー&ホーンビーや、オウエンの経営で有名なニューラナーク工場でも同様の共済基金が1810年代には設立されている。 *Lords Sessional Papers*, CX (1819), *Evidence on Children in Cotton Manufactories*, pp. 399-400 ; A. J. Robertson, 'Robert Owen, Cotton Spinner : New Lanark, 1800-1825', S. Pollard and J. Salt eds., *Robert Owen, Prophet of the Poor* (1971), p. 149-150.
 - 12) *Manchester and Salford Advertiser*, 6 April. 1836.
 - 13) *P. P.*, 1816, III, *Report on Children in Manufactories*, p. 355. なお、こうしたフィリップス&リーの直接管理体制への移行の背景には、1810年の合同紡績工組合の成立と彼らによる1810年争議という社会状況が存在するが、この点については、とりあえず、J. L. Hammond and B. Hammond, *The Skilled Labourer 1760-1832* (1920), p. 93 ; J. R. Cuca, 'Industrial Change and the Progress of Labor in the English Cotton Industry', *International Review of Social History*, XXII (1977), p. 244-245 ; Kirby and Musson, *op. cit.*, p. 14 ; Glen, *op. cit.*, pp. 69-70, を参照されたい。
 - 14) 1818年ストについては以下の研究を参照されたい。 J. L. Hammond and B. Hammond, *op. cit.*, pp. 96-109 ; Kirby and Musson, *op. cit.*, pp. 18-21 ; Glen, *op. cit.*, pp. 71-75.
 - 15) *Annual Register*, Chronicle, 1818, pp. 90-91 ; *P. P.*, 1824, V, *Report from Select Committee on Artizan and Machinery*, p. 575.
 - 16) イギリス綿紡績業全体ではその後も依然として間接雇用体制が主流であったが、1810-2年にフィリップス&リーを中心として管理体制が大きく変化し、実質的な直接管理体制が確立したと考えることが出来るが、これらの点については、稿を改めて論じたい。

VI おわりに

フィリップス&リーのパートナーの一人であるジョージ・リーは1826年に死亡した。葬儀にはソーホーのボウルトン、リーズのゴット、ランカシャの綿工業家ではグレッグ、エヴァート、ケネディやフィリップス家の面々と、マンチェスター各界の名士が参列したのみならず、フィリップス&リーの労働者が200人以上も参加したなかで行われた。また、『マンチェスター・マーキュリ』、『マンチェスター・ガーディアン』などといった地方新聞だけでなく、『ジェントルマンズ・マガジン』といったロンドン発行の有名雑誌までもが長文の哀悼記事を掲載し、亡くなったリーの功績を褒め讃えた。残ったパートナーのジョージ・フィリップスはアクティング・パートナーであるリーの死去を契機に綿紡績業からの撤退を決定し、ソルフォド工場を綿商人・貿易商であるランパート・フル&ジャクソンに売却し、フィリップス&リーはここに命運を終えた¹⁾。

しかし、その後も、フィリップス&リーの業績はランカシャの同時代人の心に残り続けた。オウエンは1857年に発行した彼の自伝の中で18世紀末から19世紀初頭のマンチェスターの綿紡績業界をリードした企業としてフィリップス&リーをあげ、マンチェスターのケイ・シャトルワース卿は、1866年にリーを「我々の偉大な技術者」と表現した²⁾。だが、その後、産業革命の旗手としてのフィリップス&リーの名声は忘却の彼方へと埋もれてしまったのである。

しかし、ここで詳しく見たように、フィリップス&リーはイギリス産業革命の革新的企業家の一つに相応しい企業であったといえよう。彼らは、時代の動きを捉えミュール紡績業に逸早く着目するとともに、自己資本だけでなく、外部資本の借入に依存するとともに、実質的にはリーが経営者として企業の経営を担当するという画期的な方法により、企業を運営していたのである。つまり、商人フィリップス家の資金力とリーの優れた技術者・経営者としての手腕が結合したことによって彼らは経済的な成功を勝ち取ったと見てよいだろう。と同時に、フィリップス&リーは当時最新の技術を導入することに熱心であ

り、その中で、工場環境の改善などをも実現していたのである。

しかし、それ以上に重要なことは彼らが行った労働者対策であろう。フィリップス&リー、より正確にはジョージ・リーは最も最初に労働者に定時労働を強制するとともに労働者の慣習ではなく資本家の命令によって生産の秩序を作り出したのであった。と同時に労働者運動に対抗して資本家による共済基金をイギリスで最初に設立するとともに、戦闘的な綿紡績工を解雇し、従順な女性労働者を紡績工として養成するという当時としては画期的な直接管理体制を打ち立てたのであった。こうしたリーの発案によるフィリップス&リーでの労働者管理の実験は19世紀イギリス綿工業においても一定の意義を持っただけでなく、その後の資本主義経済のあり方を先取りしたのものとして評価することも出来よう。

ともあれ、18世紀末から19世紀初頭にかけてのイギリス資本主義の発展は、フィリップス&リーなどの革新的な産業資本家の存在によって担われていたといつてよい。しかも、フィリップス&リーの資本蓄積のあり方は、従来の研究が主張してきたような個人資本家的な産業資本家像とは殆ど相入れない性格を持っているといえよう。と同時に彼らの資本家的活動は単に貨幣市場や資本市場でのそれに限定されておらず、生産技術の改良・実用化のみならず、労働者の管理問題までも広がっていたことが注意されなければならない。このことは、原理論や段階論の研究において、より積極的に生産編成や労働編成の問題を考察することを要請していると思われる。

そして、最後に、忘れてはならないことは、資本主義経済の発展過程において、労働編成が労働者の慣習ではなく資本家の管理のもとで行われるという、フィリップス&リーによって主導された資本家にとってのいわば革命的な活動は労働者の自律的な世界を破壊してゆく過程でもあったといつてよい。その中で、労働者は何を失い、労働者の生活はどのように変化したのか、といった問題は、資本主義経済を批判的に把握するマルクス経済学にとって、今後、詳しく分析して行かねばならない大きな課題であるといえよう⁹⁾。

1) *Manchester Mercury*, 26 August. 1826 ; *Manchester Guardian*, 12 August

産業資本像の転換のために（田中）

1826 ; *Gentleman's Magazine*, 1826, pp. 281-282.

- 2) Owen, *op. cit.*, I, p. 28 (訳61頁) ; *City News and Queries*, IV (1882), p. 205.
- 3) マルクス経済学にとって最大の関心事であるはずの資本主義経済における労働者の問題は、マルクスにおいては搾取或いは窮乏化といった概念を中心にして把握されていたために、労働者の生活の質的な変化の問題を積極的に捉える枠組みが存在しないと見えるが、宇野理論においては、周知のように資本主義経済の根本矛盾が労働力商品化の無理として把握され、こうした問題を射程の中に捉えることが可能な枠組みになっているにも関わらず、従来、余りにもそれはいわば量的な無理の問題のみに考察が集中し、資本主義的生産の確立と発展に伴い労働過程がどのように変容し、労働者の生活が変化するかといった問題が看過されてきたように思われる。その意味では、具体的な分析については、異なった理論的枠組みに依拠しているとはいえ、アメリカのラディカル派、イギリスのニューレフト、フランスのレギュラシオン学派の研究が先んじていると言え、日本のマルクス経済学にとって今後の研究課題であるといえよう。